系列

岡本俊弥

ここで定義が更新される。

「何をやってるんだ、先週と同じとか平気で言うな」

課長は、会議で声を荒げることが多くなった。

「基板アッセンが五二〇円で先週と変化なし、ドライバが二〇〇円で先週と変化なし、パネルが……」

いまも、数字を抑揚なしで読み上げる若い社員の報告を、途中で遮って怒鳴りつけた。

「変化なしって何もしなかったのか。何をしたのか具体的に言えよ」

「……」

相手は黙りこむだけで、反論もしてこない。存在感が希薄なのだ。黙っていた方が後々手間取らないと分かっているからだろうか。確かに説明を聞いたところで、できなかった言い訳なのだ。納得できる言い分などまずなかった。どうせ、議論にならない。

課長は原価管理部門に属している。

毎週、商品革新検討会と称して、コストダウンを目的とする会議を開催している。商品部門の担当リーダーが自分の開発機種を持ち寄り、十パーセントの原価低減となる案を報告するのだ。だが、進捗は芳しくない。トップが命じる目標には全く届かない。

「課長、部下に対するしゃべり方は、よほど気をつけてもらわないと。パワハラになると、懲戒の対象です」

人事部門のコンプライアンス担当から、警告のチャットがあった。目標達成ができず、その上パワハラとなれば、口頭注意だけではすまないだろう。

「こっちの身にもなってみろ。俺がきつく言うのは、報告になってないからだ」
「育てるのも課長の仕事でしょう」
「バカいうな、学校じゃないんだ」
寝ぼけた奴らに甘いことは言っていられない、とキーボードを叩きかけ、手を止める。同じような応酬を何度もしたからだ。
俺だって、何をしたらいいのかなんて分からない。それを考えるのが担当の仕事じゃないのか。しかし、それなら俺の仕事は何なのだ。
自信のなさが腹立ちになって表に出る。あの頼りない担当リーダーと俺は同じなのではないか。解がないから、無用なやりとりを繰り返すのだ。
追い詰められていた。
汚れが目立つ休憩室で、無表情に自販機のコーヒーを飲む。不機嫌な課長には誰も近づいてこなかった。
課長は独身だった。
早くから管理職に昇進したが、実力もそこまでだ。意欲は数年でなくなり、時間ば

かりを喰う非効率な仕事に追われる日々は、神経を少しづつすり減らしていった。最近の査定は、現状維持のゼロか減俸となるマイナスだった。成果がないからだ。

誰かと付き合う時間など、できるわけがなかった。

夜中まで働き、寝るためだけに部屋に帰っても出迎えはいない。今ごろなら、外に居た方がましと思えるくらいの熱気が迎えてくれる。

もう俺は終わっているのかもしれない。

というか、とっくに終わっていて、知らないのは俺だけなのか。

紙コップを握りつぶして立ち上がろうとしたとき、見慣れないものに気がつく。

部屋の片隅に、何かが置かれている。

もともとドラセナだかユッカだかの、観葉植物があった場所だ。いつの間にか撤去されていた。どうせレンタル品なので、経費削減されたのだろう。すぐに慣れたが、自販機以外何もない白い壁だけの部屋は、殺風景すぎると思った覚えがある。

人形、それもマネキンほどもある大きなものだった。
肌色に塗られ、デフォルメされた人間の形で、顔かたちはあるが髪の毛はなく、目は窪みで表現されている。全身は女性の輪郭のようだった。
何のための人形だろうか。
不審に思ったが、すぐに忘れてしまう。
翌朝も販売予算関係の会議が続いた。
それが終わると、メールの山を眺め、重要度の低いものを躊躇せずに削除する。およそ関係なさそうな部門からもメールは届く。連絡事項の宛先に入っていないと、知らないから協力しないなどと、子供じみた嫌がらせを言う奴がいるのだ。その結果、あらゆるメールが届くようになった。
馬鹿げている。
会議やメールの整理で何かが変わるわけではない。しかし事務的な作業を続けていると、大仕事を終えたように錯覚する。もちろん、何も終わっていない。
課長は焦りを感じる。

休憩室に寄った。

つぎの会議の準備をしないといけない。ずいぶん前に全社禁煙になって以来、休憩室をたまり場にする社員はほとんどいなくなった。誰もいない。薄いコーヒーを飲む間くらい、気を抜いてもいいだろう。

すると、課長は、舘石喬子が休憩室の隅に立っていることに気がつく。

A・舘石は課長の部下である。

B・舘石は語学とＩＴに長けた部門のエキスパートである。

C・舘石はよく通る声の持ち主である。

D・舘石は男女を問わず部下からの信望が厚い。

E・舘石は薄化粧で古風なロイド眼鏡を愛用する。

F・舘石は課長と仲がよい。

舘石（A、B、C、D、E、F）は無時間の集合である。

1・舘石はS市に生まれ高校まで暮らした。
2・舘石は奨学金を得て大学を卒業し、語学留学経験がある。
3・舘石は就職後に両親を事故で亡くし、兄弟もいない。
4・舘石は入社五年目に係長となる。
舘石（1、2、3、4）は時間属性を持つ集合である。

「今週もよろしく」
課長は声をかける。
「いつもどおりやりますよ」
眼鏡を外しながら、舘石喬子は答えた。
商品革新検討会は舘石が仕切っている。課長が発言することはほとんどない。舘石の口調は、感情的ではないが厳しい。その一方、常に公平な議論をする。最後には相手を必ず納得させる。会議出席者は同輩の男が多いが、舘石喬子は明らかにリーダータイプだった。

「いやいや、きみがいないと会議は成り立たない」
課長は落ち着いた声で言う。
「毎週そうおっしゃってますね」
すると、二人とも笑顔を浮かべる。
そうなのだ、彼女がいるから目標は達成できる。
ストレッチゴールを立てろと促されても、問題はない。
舘石には、四半期ごとの査定で常にプラスをつける。この部下がいる限り、課長のランクアップも間違いないだろう。
舘石と雑談を交わすたびに、課長は安心感が増していく。理由は取り立ててないのだが、平穏な気分になれるからだ。親しみを感じるのは、舘石喬子の個人的な過去を知っているせいではないか。
S市の光景が思い浮かんだ。街路が広く、真っ直ぐな碁盤目状の道路だ。立石の実家は丘陵地の住宅街にある。聞いただけにしては、ありありと風景が見えてくる。
そういえば、いつ聞いたのか。

面談をしたときか、いまのような雑談の合間だったろうか。
小学校の校門、中学校のグラウンド、校舎の形。断片的な記憶だった。
故郷を案内されたわけでもないのに、妙に生々しい。まるで自分の体験のようだ。
妻の過去ですら、ここまでは知らないというのに。
妻、そういえば俺には家族がいる。
課長は戸惑う。
なぜあらためてそう思ったのか。結婚してからもう二〇年になるのに。

隣の机に、顔のない人形が座っていた。

輪郭だけで目も口もない顔、濃い肌色に塗られた胴体。着席したマネキンのようだが、つや消しされた材質が、紙なのかプラスチックなのか、一目では判断できない。
何だろう。
課長は横目で見ながら席に戻る。

人形が置かれているのは、部長席だった。
誰かが持ってきたのだろうか。あとで確かめようと思ったまま、雑務に追われるうちに忘れてしまう。
すると、課長は、鷹前弘毅が席に戻っていることに気がつく。でっぷりと太っており、頭は禿げかかっている。眼鏡をかけて、いつも端末に向かって指を動かしている。年齢的には課長と同じか、少し年下だったかもしれない。

A・鷹前は課長の上司、部長である。
B・鷹前は研究所出身で論理的な説明を好む。
C・鷹前は感情的なネゴシエーションを嫌う。
D・鷹前は苦手な分野はすべて課長に丸投げする。結果を確認しようともしない。
鷹前（A、B、C、D）は無時間の集合である。

1・鷹前はO市に生まれる。

2・鷹前は一流大学を卒業する。
3・鷹前は結婚し、妻と子供二人という古典的な核家族を作る。
4・鷹前は入社以来二十数年基礎研究を仕事にしてきたが、数年前に配転となる。
鷹前（1、2、3、4）は時間属性を持つ集合である。

課長は黙って作業を続ける。
鷹前部長から指示が出ることはあまりない。たまに話をすると、必要以上に理屈っぽいやり取りになる。
「コストが下がったというけど、どういう理由で下がったのかね。購入数を増やしたわけではないんだから、何か工程を省いたせいじゃないのかね。そうだとすると、品質低下のリスクが出てくるから注意しないといけない。ちゃんと確認できているのかね。納得のいく理由は分かっているのかね」
鷹前は会社の状況などを週一回の会議で話すが、断片的でよく分からないことが多い。興味のない分野はぞんざいな扱いをする。経営数字に関心がないのだろう。

「まあ、会社の売上なんて数字だけを聞いても意味がないだろ。論理的な理由があってこその数字なんだけど、そんな話はないからね。根拠がない数字は信用できないからね」

なぜ愚痴めいた文句ばかりを、部下の前で言うのか。課長たちは、さっさと辞めてくれればいいのにと陰口をたたく。ただ、鷹前部長には何をしても咎められないという大きなメリットがある。きまぐれな指示を出したり、我流を通すわがままな上司よりましだった。鷹前にとって、おそらく今の仕事は不本意なのだろうが、別にそれはどうでもいい。干渉が少ないだけ楽なのだ。

焦ることはないだろう。公表されている会社の業績は良くも悪くもない。売り上げが横ばいでも、利益は出ている。課長たちの努力の成果だ。

と、ここで二つの集合の意味を説明しておく。

無時間の集合とは、順序を持たない集合である。それぞれの要素が並列に置かれ、現在「いま」の時点でのみ有効な属性を持つと考えればよい。

時間属性は順序を持つ集合だが、それは単に順序、前後関係を表すのであって、絶対的な時間の存在を意味するわけではない。順序さえ満たせばよい。つまり、定義がなされた瞬間に、過去から現在までが一度に創出されたとしても矛盾しない。たとえ一瞬であったとしても、創出されたすべては前後の関係を持って並んでいる。

集合は定義されることによって存在するようになる。集合間に因果関係はないが、新たに定義された集合と、それ以前の集合とが矛盾する場合、矛盾した項目は上書きされる。

さらに空間を定義する。

空間は縦一〇メートル、横二〇メートルの長方形である。その先にも、さらにスパンは広がるようだが、定義されていない。

縦の方向に机が何列も並べられている。十列を越える。その先は定義されていない。列には十人分の机が向かい合わせに並び、島を成している。窓辺には横方向に大きめの机が一つずつ置かれ、縦方向の島とペアを成している。窓は嵌め殺しで開けることができない。課長は一番端の窓際で、窓を背にして坐る。隣に部長席があり、管理部

の列は、四人の課長の前に置かれている。位置関係に時間要素はなく、非時間的な特性もない。空間の内部に五メートル四方ほどの会議スペースがある。

課長はその二つの空間を行き来する。空間の外に退出することはない。いや、無時間のタイムラグで退出することはあるが、時間経過はないというべきだろう。仕事が終わり退勤する。と、同時に朝が来て出勤する。前後関係だけが保たれ、退勤後の空間、時間は定義されていない。そもそも絶対的な時間など存在しない。

課長はたびたび人形を見かけるようになる。課長の記憶は、人形の定義により書き換えられる。定義されると人形は過去現在を持つ人になり、性格が与えられ、会社の中での地位が与えられ、課長との人間関係が決定する。

ここで、課長はナチケット・クマルからメールを受け取る。

クマルは統括部長である。

A・クマルは親会社から派遣されてきた。

B・クマルにとって、この配転は望んでいたものではない、
C・クマルは合理的な思考のできないこの会社の人間を嫌っている。
D・クマルは自分のやり方で命令する。部下の意見を聞かないか、聞いても無視する。

クマル（A、B、C、D）は無時間の集合である。

1・クマルはインド中部カルナータカ州B市に生まれる。
2・クマルはＩＩＴを卒業する。
3・クマルはアメリカの大学でＭＢＡ取得後、米国資本の本社に入社する。
クマル（1、2、3）は時間属性を持つ集合である。

どこで聞いたのだったか、統括部長のこういう処遇が、栄転なのか左遷なのかよく分からない。この会社の海外部門にも外国人はいたが、たいていは日本好きで日本語をある程度理解した。個人的な趣味で仕事をしていたのだ。しかし、外資に買収され

てから、通訳程度の実力しかない社員は早々に首になった。
クマルは英語しかしゃべらない。もちろんメールも英語になる。日本語を学ぶ必要性など感じていないようだ。
クマルの英語のだいたいの意味は分かる。そもそも難しい言葉を使わない。こちらの英語力をよく分かっているからだ。
「会議の開始時刻を一二時にする。出席者は遅れずに参加すること。会議はワーキングランチのスタイルにする」
統括部長の一言で、昼の休憩時間に会議が行われる。ランチを会社が用意してくれるわけではない。各自がコンビニのパンをかじりながら、いつもの会議をするだけだ。食事時間を多めに取る海外なら、時間節約の意味はあるのだろうが、統括部長がはじめたこの会議は、悲しくなるほどみすぼらしい。
わざと屈辱を与えているのではないか。やり方が気に入らない、辞めたいのなら去れ、そんな人員削減の意味があるようだった。
すると、課長に向かってクマルが何か言う。

「XXXXXXについて報告せよ」
「え、」
突然の質問の意味が分からず、課長はパンを取り落とす。横を向いても、部長は知らないふりをする。
「YYYYYなのか」
「あ、いや」
いやな汗が噴き出してくる。
「あの、」
この会議では、統括部長が一方的にしゃべるのがふつうだった。議論をしないのだから当然そうなる。英語はしだいに早口になり、聞いていても途中で緊張が続かず、何を言っているのか分からなくなる。長すぎるのだ。もちろん、質問の準備など何もしていない。
周りからは無視されている。代わりに聞かれるのを恐れているのだろう。
汗を拭いながら、単語を並べていく。

「あい、きゃんのっと、あんだすたんど、ゆあ、くえっしょん」

ここで定義が更新される。
A・クアールは母星から派遣されてきた。
B・クアールにとって、この配転は望んでいたものではない、
C・クアールは合理的な思考のできない人間を嫌っている。
D・クアールは自分のやり方で命令する。人間の意見は一切聞かない。
クアール（A、B、C、D）は無時間の集合である。
クアールは時間属性を持たない。

何かが視野をよぎった。打ち付けるような音がして、課長の首に絡みつく。太いロープのような、ぬめる紐のようなものだった。ぎりぎり首が絞まっていく。
「あ」
会議室には巨大な黒猫が座っている。

猫に似ているといっても猫ではない。真っ黒の体には体毛は生えていない。猫を思わせるのはその目だ。金色に輝く瞳のなかに、縦向きのスリットが入っている。

前足に相当する部分には、イソギンチャク様の触手がうごめいていた。その一本が課長の首に巻きついている。

空気が吸えず顔を真っ赤にした課長を、クアール統括部長はぞんざいに投げ捨てる。

「ＺＺＺＺＺＺＺ」

また何か言ったが、せき込む課長に聞き取る余裕はない。倒れた課長を放置したまま、会議はそれでも一時間続いた。瞬きしない目に見据えられると、全身が硬直してしまうのだ。それでも、統括部長の言葉を理解できたものは一人もいないだろう。

派遣幹部の行動については訴える部署はない。彼らは何をしてもよい。というより、人間の習慣など知らないのだから、何をするか予測不可能だった。殺されないだけでもましなのだ。

毎日のこととはいえ、恐怖心が溜まっていく。

ここで定義が更新される。

A・タカサキ・コウキは課長の仮想的上司、仮想的部長である。

B・タカサキ・コウキは学習した会話をさまざまなバリエーションで反復することができる。

C・タカサキ・コウキは感情的なネゴシエーションをする機能を持たない。

D・タカサキ・コウキは人間の部下に対してアドバイスを行う存在で、自身は何も行わない。

タカサキ・コウキ（A、B、C、D）は無時間の集合である。

タカサキ・コウキは時間的属性を持たない。

隣の席はいつも空席になっている。椅子はない。その代わり、机の上には小さな真四角の箱が置かれている。課長が視線を向けると、席にタカサキ・コウキが座っているように見える。リアルな立体像だが、実物が存在しないことは知っている。そうであっても、上司は上司なので、業務命令には従う必要がある。タカサキ・コウキが声

をかけてきた時は、一応でも聞いておかなければならない。
「XXXXXXXXはどうなっておるのかね」
一瞬、答えに詰まる。背中に汗が流れる。聞き取れないのだ。
「XXXXXXXXはどうなっておるのかね」
同じ質問が繰り返される。
「え、ちょっと聞こえないので、もう一度お願いできますか」
「XXXXXXXXはどうなっておるのかね」
タカサキ・コウキは機械的に繰り返す。課長が答えられないでいると、何も言わなくなる。その間も、タカサキ・コウキの画像は一切の表情を見せない。会社の体制が変わってから、異動してくる社員が多くなった。実体を伴わない異動も頻繁にある。リモートによる単なる投影なのか、本体も存在せず本当の仮想なのか、課長には見分けがつかない。
質問は終わったのか。答えないままでいいのだろうか、いいわけがないのだが。課長はえたいの知れない不安感を抱えたまま仕事にもどろうとする。

ここで定義が更新される。
A・タテイシ・キョウコは課長の部下である。
B・タテイシ・キョウコはヒューマノイド型ロボットである。
C・タテイシ・キョウコは人間とのフェース・トゥ・フェースを司る会話型ロボットである。
D・タテイシ・キョウコは眼鏡の女性の姿を模す外観をしている。
タテイシ・キョウコ（A、B、C、D）は無時間の集合である。
タテイシ・キョウコは時間的属性を持たない。

「カチョウ、今日の会議はいかがいたしましょうか」
かこん、かこんと特有の足音を立てて、タテイシ・キョウコが机の前に立つ。
スーツを着た人の格好をしており、多様な表情まであるのだが、いつまでたっても親しみが湧いてこない。遠目はともかく、会話すると人間ではないことがすぐわかる。

表情、声の調子、視線や体の動きに違和感がある。
なぜいまさらそう思うのだろう。とっくに慣れたはずなのだが。
「あ、ああ、いつものように進めてくれ」
「カチョウ、あいまいな言語表現は禁止されております。明確な指示をお願いします」
「ああ、各担当の報告を確認して問題点を指摘すれば……」
「カチョウ、あいまいな言語表現は禁止されております。明確な指示をお願いします」
タテイシ・キョウコは平然と繰り返した。
課長は混乱する。先週も同じことを言ったような気がする。その後、どうしたのだろうか。そう、毎週のことなのだ。なぜこんなことで立ち往生するのか。
黙り込んでいると、タテイシ・キョウコの両手がゆっくりと持ち上がっていく。何をするつもりなのか。座ったままの課長の肩まで上がる。と、手は蛇が獲物に飛びつく速さで、課長の首に向かって動いた。首が掴まれ締められる。
「あ、ぐぐぐぐぐ」
声が出ない。腕をつかんで剥がそうとするが、力を入れることすらできない。統括

部長につけられた傷跡の上だ。そのまま体ごと持ち上げられていく。体を机の上に引き摺り出され、備品類がばらばらと床に落ちたその上に、課長は叩きつけられる。

タテイシ・キョウコは、喘ぎ声の課長を無表情に見下ろすと、そのまま立ち去る。誰も助け起こしに来ない。人がいないのだろうか。

床のタイルに這いつくばる。手足が硬直したようで身動きがとれない。

視野の端の方で、背の低い動物様のものが歩いている。首があまり動かせず目だけを遣るのだが、その視界の外へと逃げていくのだ。一匹だけではない、何匹も何匹もがうごめいている。天井付近には、鳥なのか蝙蝠なのか、小動物が飛んでいる。いや、ドローンだろうか。狭まった視野角の限界付近だった。明瞭には見えない。

会議室付近からは、強い光が漏れていた。室内はうす暗く、漏れ出る赤い光だけが床を照らしている。光がゆらゆらと動く。あそこにも何かいる。踊っているのか、跳ねまわっているのか、影は一定の周期で回っている。

耳がどうかしている、音は一切聞こえない。

やっとのことで、課長は起き上がる。

立ち眩みのように、急に世界は真っ白になる。首筋がひどく痛み、体がふらつく。また倒れるのかと思ったが、部屋はしだいに輪郭を取り戻していく。

大部屋のなかはやはり誰もいない。会議室にも人の気配はない。床から見えた動くもの、飛ぶものはすべて消えていた。ＬＥＤ照明の、白々とした光が満ちている。暗がりなどない。

横方向のずっと先、部屋の反対側まで見えた。あんなに遠かっただろうか。同じ配置の机がどこまでも並べられているだけだ。

俺は、いったい誰だ、名前は。

ここで定義が更新される。